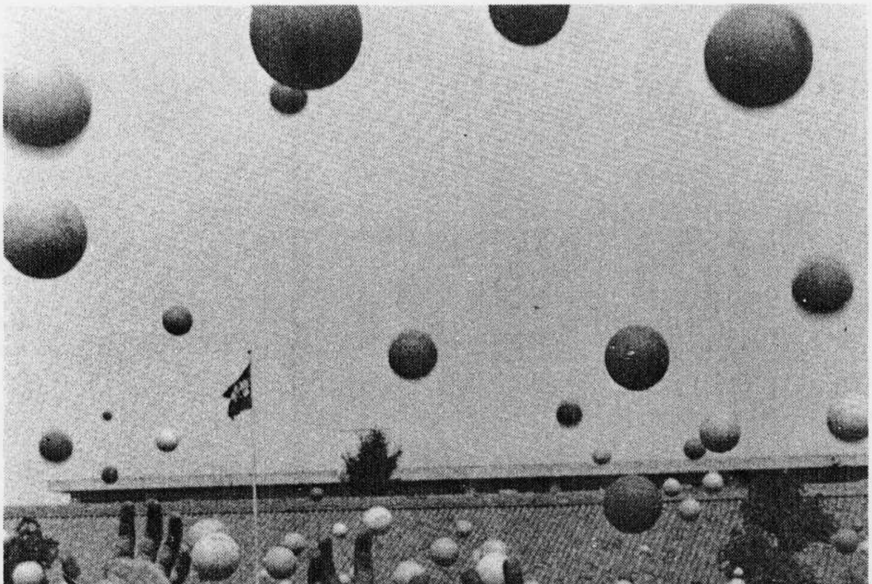
月報 岡崎の教育 1月号



（大空に向かって――岩津小）

先生にボールをもらった。
緑色のボールだ。
顔より大きいボールだ。
広い運動場で投げ上げる
みんな一せいに投げる。

赤・白・青・黄・緑
ふうせんみたい。
「わあい。わあい。」
ぼくのが一番高いぞ。

三年　斉藤一成

昭和52年1月1日
編集・発行
岡崎市教育委員会

—教育随想—

過大校と過小校

内田喜久

早いもので私が市長に就任してから六年になる。

そして岡崎の町づくりが、歳月の歩みとともに前進し、景観・内容ともに西三河の中核都市にふさわしい面目を呈してきたことは喜ばしい。

中でも教育施設の拡充は、文教の町を目指す本市にとって、最優先の課題として取り組み、それなりの成果を上げてきたことはうれしい。

こうした中で、今、昭和六十年を目指した新総合計画の策定に取り組んでいるのであるが、教育施設計画は大きな柱となっているのである。

ここ三年間に、岡崎市は緑丘、大門、竜美丘、城南四校の新設を行い、学区数も一挙に三十八となった。

これらの新設校はいずれも過大化防止の為に取った措置であるが、他の都市がこれらの解決にあたって、児童数が千六、七百から二千名を超えてから取り組んでいるのに比較すれば、本市の場合、千百～二百名で学校新設に踏み切っており、著しく前進的であると言えよう。

長期計画でも人口急増地区を中心に、小学校四、中学校三の新設を検討しているのである。

学校づくりの中で、われわれの計画が過大化防止に偏り勝ちであるが、過小校の問題にも目を向けなくてはならないと考えている。

すでに額田町や新城市などでは、過小校の統合、廃止を断行しているようである。

わが国の教育百年の歩みの中で、近年過小校に対する配慮が格段に進み、教師の手厚い配置により英才教育などの指摘も一部にある。

過小校の場合、ほとんどが山間部の豊かな自然と素朴な風土に培われて、環境には恵まれている。

しかし、一面では成長期の青少年にとって、多くの同年輩の友人を得て、互いに切瑳し、努力し、啓発し合うことが必要であるが、過小校の場合、そのチャンスが少なく、特に成長期の中学校にあっては、一定規模の生徒を擁することが、教育の成果を上げるものと期待されているのである。

もとより、それぞれの学校には長年の歴史に培われた校風、地域住民の地元感情もあって、そのコンセンサスを得ることが重要であるが、将来の合理的な教育計画の中で論議の必要があろうと考えている。

（岡崎市長）

三面鏡

あそび

●ひとり遊び・賛　福田定夫

むやみに過去の遊びを現代に復活しようとするのは、檻の中の動物にものを与えることに全くよく似た行為だ。

現代っ子は遊びを知らない。だから教えてやらなければと理屈をつけながら、遊びを教えず遊び方を教えてしまう。

そこには主不在の、大人の独善と郷愁の匂いとが漂っているにすぎないのだ。

遊びとは、いかなる物質的代償をも求めることのない無垢な精神が造形する、限りない運動そのものなのだから。

ひとり遊びはよくないと大人は簡単に口にするが、本当のひとり遊びを彼らはしているのだろうか。ひとり遊びの中にこそ無限の創造性がある。

彼らに遊びを本気で教えてやりたいのなら、何も与えなければよい。（美川中）

●伝承あそび　清水悌子

子どものころの遊びで印象に残るのが、お手玉である。

「さいぎょう山は、霧深し、千曲…」

大門町で作られたしめなわが、二七市などで売り出されているのを見ると、いよいよ正月もま近という感じがする。

しめなわは、しめ飾りとして、普通いろいろなものを添える。ウラジロも、そのうちで欠かすことのできない大切なものの一つである。

イセエビ、ダイダイ、昆布、くし柿をつけるのは、まゆ玉や幸木と同じように豊年を祈念する意味があるのに対し、ウラジロはユズリハと同様、清浄な意味を持つものとして用いられる。その名の如く、裏が白いからである。

このウラジロは、ウラジロ科に属する日本の代表的な常緑性のシダで、関東以南の山地に自生して、斜面に大きな群落をつくることが多い。ヤマクサ・ホナガ・ロムギ・ヘゴなどという方言が多くあり私たちになじみ深い植物である。

ウラジロは、地下茎が長く伸び、その所々から垂直に葉柄を出す。ウラジロなどのシダ類は、地上部全体が葉であり、茎のように見えるところは、実は葉柄なのである。ウラジロの葉柄は、先がさすまたに分れていて、そのそれぞれに小葉をつけている。

ウラジロは、葉柄の中央の芽が伸びることによって、毎年一段ずつ横軸を加え、数年間にわたって成長する。したがって地上に葉柄を出した初年度のころは、せいぜい八〇センチほどの小葉を双出する程度であるが、古いものになると数段重なって二メートル位にまで伸びるものもある。

ウラジロは本来暖地性のシダであるので暖地の方が繁殖力が強い。三重県の尾鷲地方では、山の斜面を一面に覆っている大群落も見られた。市内では、桑谷山の北斜面に大型のものの大群落が見られる。

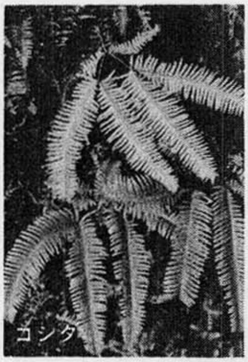
ウラジロの仲間は、世界で一三〇種ほど、日本には、ウラジロ・カネコシダ・コシダの三種が分布する。このうち、カネコシダはウラジロの仲間でありながら葉の裏が白くないという変わり種で、九州の一部にのみ産する稀な植物である。

ウラジロもコシダも、市内でごく普通に見られるシダであるが、両者では好む環境が少し違う。コシダは、日当たりのよい乾燥した斜面に、ウラジロの方は、これよりやや湿り気のある、まばらな林の下や伐採地に多い。したがって、道路沿いの傾斜面や人家近くの浅い山では一般的にコシダの方を目にする機会が多い。そのためか、コシダをウラジロと思い違えている人も多いようである。市立図書館から北東へ上る急坂の頂上付近左手斜面では、昔の小松林の面影と、このコシダの群落を見ることができる。コシダはウラジロに比べて小柄で、小葉の切れ込みもウラジロの二回に対し一回であるので容易に区別がつくはずである。常磐地区では道路に沿って両者が同時に見られる所が多い。

ウラジロは、しめ飾り、かがみもちの他にも、葉をマツタケの包装に使ったり、葉柄を籠を編む材料や箸に用いたりすることがある。

最後に、恵田学区の子どもたちの遊びを紹介しよう。ウラジロの葉柄の分岐点近くをY字型に切りとり、地面におき、分岐点を指で押え、はなすとその弾力で飛び上がる。その高さを競い合うのである。かがみ開きのあとの余興にどうであろうか。

（葵中　千賀　敏之）



手の甲に乗せたり、腕の中をくぐらせたり、当時の子どもは親しんだものである。

長方形の二枚の布を縫いあわせると、角のところにしわがはいったり、針目が大きいと中のあずきが出たりする。

母も、また、このお手玉で昔遊んだとか。いろいろな話をしながら作り方を教えてくれたことを思い出す。知らず知らずのうちに遊びのくふうをしたり、縫いものに親しみ、親と子が伝承していたお手玉。

既成品の多い今、こんな遊びが少なくなったような気がする。（福岡小）

●集団と個

中村　巌

「ぼくのとうさん、コマまわすことがうまいよ。大人って何でうまいだやあ。」社会の急激な変化のために、昔の遊びが伝承されなくなってきた。子どもの世界にタテの人間関係が少なく、断絶があるのではないだろうか。家庭や社会の生活様式の変化で、人間はバラバラで、単なる単位としての個人が存在しており、かえって主体性のない、不安な生活をおくっている。

人間は、集団における位置と役割を自覚する時、生きがいを感じる児童には、この体験がたいせつである。これがないと、自己中心的になり、社会生活ができなくなる。調和のとれた人間形成は、集団なしには育たない。児童に遊び場と時間を与えて、社会性を育てたい。（根石小）

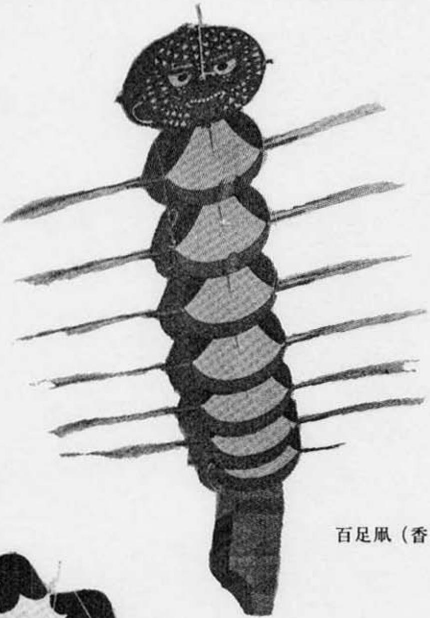
日本凧

凧(いかのぼり)きのふの空のありどころ　蕪村

凧揚げは古くから行われているが、本来は子どもの遊戯ではなく、部落と部落との競技であり、現在でも相手の糸にからませて切り合う凧合戦が諸処に行われている。

うなりを負わせたうなり凧もあり、畳何畳分もある大凧を、何人かのおとながあやつるのもある。

時代の移りかわりとともに、子どもたちの手によって大空に乱舞していた種々様々な日本凧が、もはや過去のものとなってしまったことはいささかさみしい。今や、これらの凧の多くは室内装飾用として考えられるようになってしまった。

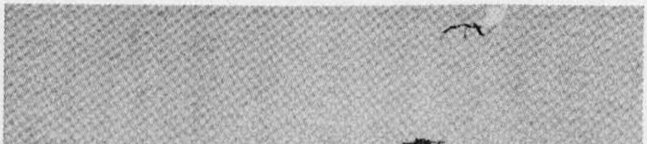

百足凧（香川）

火伏の竜（福島）

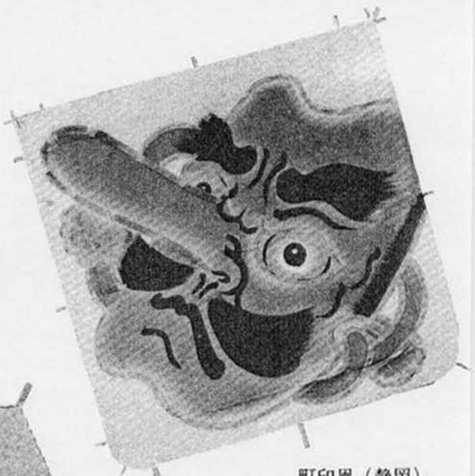
出雲の祝凧
（島根）

津軽二枚張り凧
（青森）

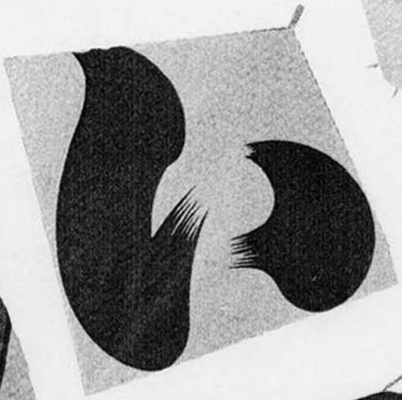
矢作北学区


連尺学区

豊後高田の
福助凧（大分）

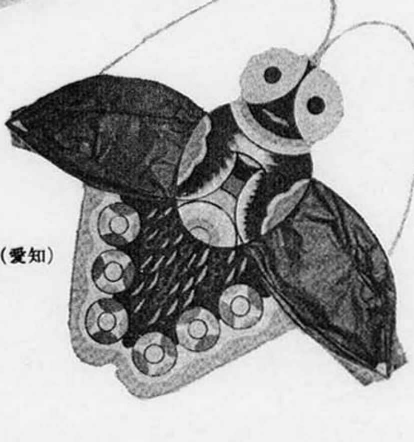


町印凧（静岡）



町印凧（長崎）

高松のせみ凧（香川）



せみ凧（愛知）

（加藤庄一氏蔵）

井田学区

統計教育

広幡小　清水　弘

「統計教育？」

数年前、塚本校長からはじめて聞いた言葉である。

「組織が大規模化し、情報も膨大化してきた現代の社会では、人間の「勘」「当て推量」などによって、的確な方針を決定したり計画を作成することは不可能に近い。特に、日本人は数字よりも「勘」によって物事を判断しがちであるから、「小さな子どもの時から統計に親しませ、資料を基礎として事実を尊重する習慣を身につけさせよう。」というのが統計教育のねらいである。

それ以来、私は児童に接する時、常に数字や図表が頭の中にこびりつくようになってきた。

最近実践した風変わりな統計教育を紹介しよう。

近頃の児童は漢字の力が劣るといわれている。そこで漢字に興味をもたせるための動機づけとして、統計的手法を使ってみた。

まず、児童のなまの作文にはどのぐらいの漢字が使用されているかを、テーマにして児童と一緒に漢字使用グラフを作成してみた。その結果から児童は、

「ぼくは長い文を書いたけど、使った漢字はたったのこれだけか。」

「○○さんは私ぐらい長さの文だけど、漢字をたくさん使っているのでびっくりした。」

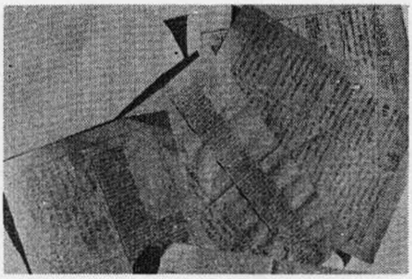
「よく調べてみたら、知っている漢字をひらがなで書いていた。」

「作文を書いたあとで、こんな表を作るのははじめてだけど、友だちの漢字の使い方がよくわかった。」……等。

クラス全員が漢字使用グラフを作成する面白さ、漢字の使い方等に興味を示した。

それ以後、児童は文章を書く時には、辞書などを利用し、何でも漢字を多く使ってやろうという努力をするようになった。

このように統計教育の素材は、何でもないところに、いくらでもあるんだなということを知ると同時に、意外なところで児童には効果を発揮するものであることを知った。



▲ 教育日々 ▼

「ミニ通信しゃかい」の発刊

矢作中　鳥山千里

私がそのようでありたいと願うすばらしい教師たちは、生徒に一つの力を得させようと努力している。つまり、自分で調べる力、またひとりひとりの疑問を大切にする力を生徒につけようとしている。

例えばある教師は、都道府県の面積が教科書と地図帳ではほんのわずか違う、との生徒の指摘を「大変なことだ」と受けとめそこから授業を再スタートさせている。

またある教師は、丁寧な指導の後、論文に取り組ませた。「ひでえことさせやがる」と言っていた中三の子らも喜々として没入し、やがてその結果に満足感を味わっている。学ぶこと本来のさわやかな疲れを生徒に体得させている。

そこで私も、と意気込む。

その一。疑問・感想・意見・できることなら討論を、と欲張って『ミニ通信しゃかい』を創刊した。「太閤検地後なぜ水のみ百姓がいたの？」「大仏造りの水銀はどう使ったの？」「テレビで将門がクギ踏んだけど、あの頃クギあったの？」…。担当の一、二年生を対象としたこの通信に、書くべきことは山とあるのだけれど発行責任者の怠慢により現在倒産寸前。

その二、社会科の具体目標の一つの「新聞を読めるようにすること」を挙げ、昨年までは、第一面の記事を順番に発表させてきた。今年は、もっと確実にしようと、台紙を配り、感想を書き加えさせて週に一回の提出とした。最初は各紙のコラム欄に限ったけれど、二学期からは何でもよいことにした。それでも提出率はすこぶる悪い。時には単に「この記事はおもしろかった」なる手合いまであり、優秀と目される生徒でも支離滅裂な文であることがままある。「あなたの母国語のリズムは少々狂っているようだ。…のようにしたら意味がとれなくもないが…」とか「根拠を述べずに、このように断定できるだろうか…」などと、かなり意地悪な（正直なところ、私の力量以上のハッタリを含めた）朱を入れて返すことも多い。

お知らせ

【寄贈刊行物・資料等】

◇本との対話　美川中学校

「読書指導の要諦は、まず教師みずからが読書人になることである」との自覚から全校職員で記録した"教師の読書感想文集"。吟味した選書、鏤骨の文章とともに行き届いた装本がすばらしい。新書版八十一ページ。

◇民俗学のこころ―杉本舜市先生を囲んで―　校務主任会

校務主任研修会での杉本先生の講演記録。民俗学研究一筋に生きてこられた先生の人間と学問を知る上での貴重な資料となっている。B6判四十ページ

盛況だった第三回冬季研修会

県外からも八十名が参加

冬休みを学ぶ第三回の冬季研修会が十二月二十五日から二十七日まで千万町の県野外教育センターで開催された。

企画、運営に当たった運営委員の先生方の努力、充実した講師陣、切実なテーマによる分科会等が好評で、会員もこれまでの最高二九〇名が参加して、折柄の寒気を吹きとばす熱気のこもった研修会となった。三日間の講師と分科会のテーマ、助言者は次のとおり。（敬称略）

【講師】▼国を想い教育を念う＝神戸海星女子大教授森信三▼二宮尊徳と現代社会＝名城大教授守田志郎▼人類の幸せを＝愛知用水開発育ての親久野庄太郎▼知恵と慈悲＝市教育委員松野尾潮音▼このごろ思うことども＝津島市教育長浜田満▼子どもとともに歩む＝奈良女子大文学部附属小教諭塩見栄▼日本語と日本文化＝京都大学人文科学研究所教授多田道太郎▼両性のロゴスの指座＝神戸海星女子大教授本多正昭

【分科会】①教師の生きがいを求めて（長島利一）②子どものやる気を起こすために（塩見栄）③学校生活におけるしつけ（綱沢昌永）④学校づくりの定石（田中繁男）⑤女教師の生き方（松本久子）⑥学級づくり（大賀真一）

■ことしも好成績県教育論文

県教委、県教育振興会主催の教育研究論文に応募した市内先生方のそれが、入賞二十一点中十三点を占め昨年に続く好成績で気を吐いた。入賞者は次のとおり。（敬称略）

【最優秀賞】▼教材を考える〈音楽〉＝杉本安（男川小）▼より豊かな音楽学習をめざして＝六ツ美北小現職教育部

【優秀賞】▼机、腰掛の号数を身長から決める＝安藤恒夫（六ツ美北小）▼高学年の読書指導＝高木明子（六ツ美中小）▼ノート指導による主体的な社会科学習の実践＝杉浦健支（六ツ美中）▼個の変容を求めた道徳授業＝西村、鶴田、江村、岡本（六ツ美南小）

【佳作】▼日常事象を数理的にとらえる能力の育成をめざす指導＝江村力（六ツ美南小）▼やる気を育てる学級づくり―学級通信を軸にして―＝畔柳吉朗（男川小）▼社会科における記録と資料の活用＝福応謙一（六名小）▼おちこぼれのない学級―記録からの出発―＝北川英雄（矢作西小）▼進んで取り組む体育学習―ボール運動を通して―＝岩津小現職教育部▼たくましさを育てる体力づくり＝城北中体育研究部▼学習意欲を育てる数学指導―数の集合と計算を一年生で試行して―＝豊嶋典明（竜海中）

■広幡小研究発表会　2月15日

▽主題＝自ら学ぶ力を育てる学習（国語、算数）▽内容＝公開授業、分科会協議、講演（講師県教委学校教育部長鈴木泉先生）※三河学び方研究会共催

研修会語録

○…ケインズより一世紀も早く貨幣の持っている意味を明確にとらえたのが尊徳である。（守田先生）

○…愛知用水を成しとげた中で痛感したのは徳がないとできないということだ。その徳を授けるのが教育の仕事だと思う。（久野先生）

○…あらゆる人の苦しみ、悩みを真正面に対して開いてくれるのが観音様だ。教師も、三十人生徒がいれば三十面観音になることが必要である。（松野尾先生）

○…東洋では自己を語るより態度を中心とする。

○…今の世は便利ではあるが純朴さを失いつつある。電話をするよりはがきを書かねばならぬ。（森先生）

○…無国籍の人間教育ではだめ。家庭教育再建が基盤だ。

○…低俗民主主義が仮面をかぶって横行している。（浜田先生）

○…子供の悩みや悲しみが解るためには教師の心は柔軟で開かれていなくてはならない。（塩見先生）

○…侵食されたかにみえる日本語だが、名詞は影響を受けても動詞は少しも変わらない。動詞は日本文化の底の方に位置している。

○…漢字・カタカナは文化の取り入れ口であった。（多田先生）

○…性は人格的なもの。性教育は、つまるところ人間とは何かの教育につながるものである。（本多先生）

本多李喬句碑

矢作橋を西に渡りきるとすぐ左に光明寺が見える。一号線を左に折れると境内で、本堂に向かって右手に句碑が立っている。

矢作川霞の中を流れけり

天保十一年に建立された本多李喬の句碑である。本多中務大輔家は、忠勝より十一代の孫忠粛の時、明和六年石州浜田より岡崎へ移封された。忠粛の祖父が忠良で、その三男が忠寛である。忠寛は三秀亭李喬と称し俳句をよくした。安心院に現存する芭蕉の句碑旅寝塚はこの李喬が建てたものである。寛延二年出生し、文化八年江戸に卒した。年六十三。

春霞の中を矢作川が悠々と流れる句の趣は今も変らない。

光明寺の近くに、うなり石で有名な矢作神社があり、矢作堤に「矢はぎ川弓はり月のかげさしてきよきながれに千鳥なくなり」というご大典記念の歌碑がある。

所在地　**岡崎市矢作町加護畑光明寺**

カット　井田小　川澄由紀子

けしごむ

「結構です」――ある時はほめる時に、またある時は断わる場合に使われる言葉。日本語にはこのような言葉が多い。「ドウモ…」と言えばすべてがことたりたりする。日本語は不思議な言葉である。このように味のある日本語を大切にしようと一字一句を吟味しつつ原稿を整理していたらもう午前零時。

こどもらと手まりつきつつこの里に遊ぶ春日はくれずともよし　良寛

一月六日は良寛忌である。

現代においてもはや絶滅しかかっているように思われる一つのヒューマニティを、あらためてかみしめてみたい。

しん（親）切、人のためになるように、優しくつとめることである……。

「すみません」「ごめんなさい」「ありがとう」の心や態度に通じると思う。

「真の人たるの名に恥じざる者は、一身を顧みずして能く人のために尽し、人のために謀るなり。」とか。

教師は自己にきびしく生きたい。

む（無）限に秘めた可能性をいかにして引き出してやるか。

成績はよくても、学校や先生、友だちに対して魅力を感じない子が一方ではいるかと思えば、先生にはしかられる、友だちとのけんかが絶えない、しかし、学校がおもしろくてしょうのない子もいる。そんな子どもの世界をしかと見つめたい。

この本を

○日本をダメにした戦後教育	西　義之
山手書房	¥ 840
○英語教育の諸問題	細谷　友一
研究社	¥ 850
○ミケランジェロ	会田　雄次
新潮社	¥ 680
○子規と漱石	和田　利男
めるくまーる社	¥ 1,600
○禅と人生	秋月　龍珉
雪華社	¥ 950
○手紙の歴史	小松　茂実
岩波書店	¥ 280
○美しきものとの出会い	井上　靖
文芸春秋	¥ 1,700
○花　神	司馬遼太郎
新潮社	¥ 800
○この父にして	斎藤茂太・北杜夫
毎日新聞社	¥ 880
○カワハギの肝	杉浦　明平
六興出版	¥ 1,800